

Vol.31



にやいほっと! いっぽかわらばん

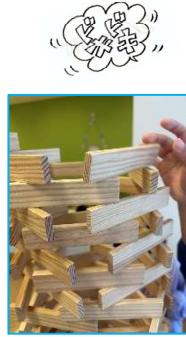
歳を取ろうが、身体が不自由になろうが、生涯現役!イキイキ生活を目指そう!!

2025年12月号
株式会社リハビリホーム一歩
代表取締役 阿部 裕一
上尾市大字上尾下 859-1
電話: 048-871-6956
編集部: 辻菊江

「リハビリホーム一歩」グループ3施設の日常を紹介する暖かい気持ちになる新聞です!

リハビリホーム一歩

朝出勤すると、Yちゃんから「おはよ! 井出さんより高くしたのがあるの♪見たい?」とかわいいお誘いを受け速攻見に行きました! みんなで団結してまだまだ高くしていくそうです! 一体どこまで高くなつたのでしょうか? 気になります!! (介護職員: 井出)



今までで1番高めめた時の写真♪

夏の間、鈴虫の声を届けてくださったO様、引き続き来夏の鈴虫を育てて下さって居ます。涼しげな声が待ち遠しい晩秋になりました。 (介護職員: 小野寺)



大谷ウクレレサウンズの皆様が演奏に来てくださいました!! 陣屋デイご利用者様のIさんのご主人様が指導者をされているとのことで奥様にお声がかかり堂々と熱唱!!

(センター長: 黒田)



リハビリホーム一歩

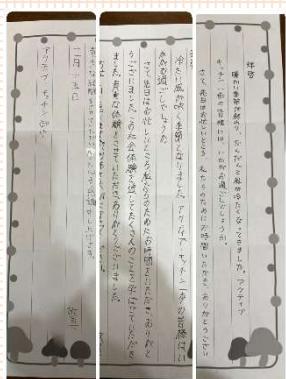


中学生の社会体験チャレンジ

ドライヤーを手伝ってもらって「お父さんにもかけてあげるの?」、「中学生にドライヤーしてもらっちゃったよ」とご満悦なSさん😊 他の方も「中学生に乾かしてもらえて嬉しい!」と、いつもより楽しそうな浴室場でした♪ (介護職員: 井出)

お礼のお手紙をいただきしっかり学習されていて驚きました、若い人たちが希望を持って飛び込んできてくれる世界にできたら良いなと思いました。 (生活相談員: 安藤)

アクティブ・キッチン



【編集後記】リハビリホーム一歩の記事が毎日新聞12月3日版に掲載されました。みんないっしょがあたり前! 高齢者が子どもたちの声で元気になり、その成長に驚くなどして刺激をもらう一方、子どもたちは見守る大人たちから褒められて自己肯定感が育まれるなど、ともに過ごすことの相乗効果についてとても丁寧に想いをまとめてくださいました。裏面をご覧ください! (辻)

HPはこちらから▶▶▶
リハビリホーム一歩 検索
<http://reha-ippo.net/>



デイサービスと保育園が一体 上尾の施設 年代や境遇を超えて ともに過ごし触れ合い生き生き /埼玉

地域 埼玉 関東

毎日新聞 2025/12/3 地方版 有料記事 1393文字



障害を持つ児童と触れ合うリハビリ施設の利用者 =

みんな一緒に当たり前——。高齢者や重度障害児向けのデイサービスと保育園が一体となった複合施設「一步」（上尾市上尾下）が、年代や境遇を超えた共生社会の実現を模索している。高齢者が子どもたちの声で元気になり、その成長に驚くなどして刺激をもらう一方、子どもたちは見守る大人から褒められて自己肯定感が育まるなど、ともに過ごすことの相乗効果が注目されている。【鷺頭彰子】

JR上尾駅から車で10分ほどの場所にある敷地面積

囲うように3棟がつながった複合施設だ。高齢者と児童、医療的ケアが必要な障害を持つ未就学児が過ごしている。

天気の良い日は園庭に出て走り回る児童の聲を、高齢者が手すりをつたってリハビリをしたりベンチに座って日なたぼっこをしたりしているほか、酸素吸入が必要な児童がバギーに乗って散歩を楽しむ姿が見られる。

施設最初の一歩は、2011年に開設された高齢者のデイサービス施設だった。大手介護施設に勤めていた理学療法士の阿部裕一さん（54）が「高齢者が生き生きするような施設を作りたい」と

退職金をつぎ込み、仲間と共に施設を運営する株式会社「リハビリホーム一步」を設立した。

高齢者向け施設を運営する中、阿部さんは、どうしても笑顔を見せない利用者が、たまたま職員が連れてきた子どもに対して満面の笑みを見せた様子を見た。「子どもと高齢者は相性が良いのでは？」。それが今の運営体制を目指すきっかけとなつた。

当初は「前例がない」「感染症が流行したらどうするのか」などと心配され、なかなか許認可が出なかったが、15年に保育所の併設にこぎ着けた。しかし、運営は更なる課題に直面した。

令和7年12月3日 每日新聞掲載

一步多世代交流の様子が記事になりました

デイサービスと保育園が一体 上尾の施設 年代や境遇を超えて ともに過ごし触れ合い生き生き /埼玉 | 每日新聞



芝生の園庭で遊ぶ子どもたちと、それを見守るリハビリ施設の利用者 =埼玉県上尾市で2025年11月、鷺頭彰子撮影

ある日、両足にギフスをつけた子どもを抱っこした女性が見学に訪れた。「うちの子も入りますか？」と聞かれたが、全く準備が整っていないので断るしかなかった。「高齢者のデイサービスをやっているのだから、当然うちの子も入れると思っていた」という言葉を聞いた阿部さんに心苦しさだけが残った。

以後、障害児向けデイサービス施設の整備を目指し、コロナ禍後の22年夏に現在地に施設を移転。24年1月、ようやく障害児デイサービス「せーの！ いいぼ」を併設することができた。

保育園の園児や高齢の利用者とのつながりを作れるように、障害児デイサービスの園庭に面した掃き出し窓前をスロープにして、リハビリのコースに組み込むなど工夫した。現在では、障害児デイサービスに子どもを預け、敷地内の高齢者デイサービス施設で働いている保護者もいるという。

施設を利用する岡口美和子さん（76）は、「小さい子の声が聞こえると癒やされ、とても良いシステムだ。子どもは日々できることが増えて、見ていると成長を感じる」とほほえむ。また、武田光代さん（79）も、「障害を持っているといつても、私だってそうだし、お互い様。声をかける子どもも喜ぶし、とてもかわいい」と目を細めて話す。

阿部さんは「0歳から100歳まで集える場所」を目標に掲げる。障害児のデイサービスは今は未就学児だけだが、学校に通う障害児の放課後デイサービスなどにも事業を拡大していきたい考えだ。「障害の有無にかかわらず、子どもから高齢者までいるのが当たり前になり、年を取っても自分らしい役割を持つ居場所作りを目指したい」と意欲を示す。